

つた副使には本邦人が任せられた痕跡があることを折角認めながら、西洋人のゴールズ人（Golds）はリケアに住むとの報告のみを取り上げ、藤田三高教授の研究に依つて明らかとなつた薩摩が當時（1853）と西洋人に依つて呼ばれてゐた事實を全面的には承認せず、従つて南海を縦横に活躍した所謂琉球人の貿易が實は日本の盛んなる精力に依存して始めて行はれたと云ふ最も大いなる問題が見逃されてゐるの觀がある。

これは著者が云ふ昭和型の歴史研究の大いなる風潮であるが、今や我國は多年の國內抗争の愚を一擲し、學國一致、興亞の大業に邁進せんとして、着々體制を整備しつゝあり、歴史學の傾向も根本より改まりつゝある。著者は既に日交交渉史研究の展望に於いて、社會全體のうちに學問があることを主張し、現實の「力」の把握を強く要求し、これを自らへの課題とし、已にこれを果しつゝあるのを觀る。今後の層一層の精進を祈つて止まないところである。（四六倍版本文六六三頁圖版一三頁、東京岩波書店發行、定價七圓）（赤松俊彦）

續日本思想史研究

村岡典嗣著

目次

第一部（序説） 日本精神について、日本精神文化の研究と國學の學問的精神、日本思想史の研究法について、國文學の註釋的研究について。

紹介

第二部（本論） 枕草紙と徒然草、神皇正統記白山本の學問的意義について、妙貞問答の吉利支丹文獻として有する意義、垂加神道の思想、日本の教育構成原理としての國學、市井の哲人司馬江漢、司馬江漢の獨笑妄言について、平田篤胤が鈴屋入門の史實とその解釋、鶴峰戊申の開國思想、明治維新の教化統制と平田神道、日本學者としての故チャンプレン教授、二鼠譬喩談と平田篤胤。

第三部（概説）、日本神道の特質。

この書は著者が昭和五年頃より既に各種の雜誌其他に一度公表したる論文を新たに輯録して、さきの「日本思想史研究」の續編として出版されたもので、別段體系的な研究の發表ではない。併し乍らその内容に就いて言へば、その論考の過半数は近世に關するものであり、神道・國學に就いて述べられたものが多い事は注意を要する。紙上の關係上、今こゝにその一々を紹介する事は許されないが、只本書中第三部概説として比較的多数の紙數を費して掲載せられてゐる「日本神道の特質」なる論考を紹介するに止める。

「太古に淵源し、上古以來、儒教佛教又耶穌教の外來宗教に對立して、而もそれらと交渉したばかりでなく、それらの影響や感化を、積極的にも消極的にも受けて、變遷し發達し來つた我國固有の宗教である」（四二二頁）神道が諸外教に對して同様に有して居る特質としては著者は、曰く皇國主義、曰く現實主義、曰く明淨主義の三を擧げる。而して第一のものは神道の倫理的特質とでも言ふべく、第二のそれは哲學的特質、第三は政治的特質であると

第二十四卷 第三號 一四一

し、且その三項に就いて、その意義を神道の諸相の中に、歴史上それら主なる發現の例に徴して説明して居る。

即ち時代を、一、外來文化の影響を受けなかつた儒教渡來以前の太古、二、儒教渡來以後殊に佛敎的影響の著しい上古、中古また中世、三、儒教の發達と隨つてそれへの反抗を特色とした近世の三つに分け、この三期に於て神道が實現した様々の相を示して居る。

之によつて明らかな如く、著者が研究の對象として取上げて居るのは、教義や思想としての神道、即ち從來普通に神道史と呼ばれた分野に於て研究された方面であり、祭祀としての神道、即ち從來神祇史が對象としたる方面は別に民俗學的分野に於ける問題としてゐる。之は思想史の成立は文化の展開を意識の方面について見る所にありとする著者の考へと全く合致するものであるが、正しい意味の思想史は著者の所謂事象としての文化の展開をもその中に含まねばならぬのではあるまいか。而してもし日本神道の特質、換言すれば神道的なるものの本質に對する考察か、やがて日本的なるもの、即ち「東洋思想に於ける日本の特質」の究明にまで高められるとするならば、それは單に教義や思想としての神道をその對象とするのみでなく、祭祀としてのそれをも（更に云へば一般信仰の問題をも、即ち教義としての神道の考究の場合に於てもそれは信仰の問題を考へる事なしにはその發展の姿は把握出來ない）前者との相互關係の中に考察する必要があるであらうか。

ともあれ、日本思想史の研究に於て獨自の見解に立ち、その深

き考察を認めしむる著者の論考十七編を收めたる本書が、學界に與へる示唆の大なる事を述べて擲筆する。（菊判四六八頁、昭和十四年二月、東京岩沼書店發行、定價三圓二十錢）（清原宣雄）

本邦史學史論叢

史學會編

史學會が今年光輝ある創立五十周年を迎ふるに當り、その記念出版の一として本邦史學史論叢を世に送つた。本邦史學史論叢は、日本に於ける史學の發達の跡をたづね、更に將來の發展に資せんとして、廣く學界の人々の寄稿を求め、これを編纂して出來上つた論文集である。上下二卷總頁千五百餘に及び、我が學界の巨擘新進の研究四十二篇を收めてゐる。我々は本書を手にして、過去半世紀の間、常にわか史學界の最前線にあつて幾多の業績をあげ來つた史學會が、今や益々健實なる發展を遂げ、かゝる見事なる論叢を世に送る事に依つて、更にわが帝國の文化に寄與しつゝある事を思ひ、衷心よこぎに堪えなかつたのである。もとより、從來とても我々は日本史學史の三四の著作を有してはゐた。然し乍らそれらはいまや本書の俸答に接して、自らその光を減ぜざるを得なくなつた感さへもある。まことに、本書の記念出版それ自體が、日本史學史研究上に記念さるべき事柄なのである。

さて、我々は少しく本書の内容に觸れる必要があるであらうが、何分にも四十數篇に及びそれぞれ獨自の主張を有する論文を一々吟味することは到底ここで出來る事ではない。従つて茲では、な